

京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE 研究拠点形成プログラム

「グローバル化時代の多人的人文学の拠点形成」31 研究会

## ユーラシア古語文献の文献学的研究

### NEWSLETTER

No. 17 2006/1/13

## 目次

研究会報告の要旨	1
第 27 回研究会報告 - 1	2
第 27 回研究会報告 - 2	6
編集後記	12

## 研究会報告の要旨

2005 年 12 月 10 日 (土) に京大会館 211 号室で開催された第 27 回研究会の報告要旨を掲載します。

## 第 27 回研究会報告 - 1

印欧語史的形態論研究： 中・受動態動詞の先史

吉田 和彦

### I. はじめに

言語の歴史的研究には、現代語の研究とは根本的に異なる問題がたえず付きまとう。まずひとつは、言語学的な情報を引き出すことのできる唯一の源が限られた量の文献資料である点である。さらに大きな問題は、文献資料は文字で書き記されているが、文字の歴史は言語の歴史に比べるとはるかに短いということである。つまり、文字が発明されるはるか以前に、すでに世界のさまざまな地域に互いに伝達不可能な多種多様な言語が拡散していたことになる。その結果、言語相互の歴史的関係やそれぞれの言語の先史は不明瞭になってしまった。

印欧語族の場合、印欧祖語から分岐した各語派の系統的な関係は、かなり明らかである。独自の複雑な形態組織によって特徴づけられる印欧諸言語は、形態組織の単純な言語に比べて、系統関係の決定がはるかに容易であったからである。しかしながら、祖語の再建およびそれぞれの言語の先史の復元という問題については、依然として多くの課題が残されている。ここでは、バルト語派やスラブ語派を除いた、古い時期の印欧諸言語に保存されている中・受動態動詞の先史について考えてみたい。

### II. 問題の所在

以下に示すのは、主な古代印欧諸言語にみられる中・受動態動詞の単数現在語尾である。

	ヴェーダ	ギリシア語	ラテン語	トカラ語 B	ヒッタイト語
sg. 1	-e	-μαι	-or	-mar	-ḫa(ḫa)(ri)
2	-se	-σαι	-re, -ris	-tar	-ta(ti), -ta(ri)
3	-te, -e	-ται	-tur	-tär	-a(ri), -ta(ri)

フランスの著名な印欧語学者アントワーヌ・メイエは、1903年に刊行された『印欧語比較研究序説』のなかで、当時知られていた諸言語にみられる対応に基づいて、1 sg. \*-ai、2 sg. \*-sai、3 sg. \*-(t)ai という語尾を再建した。しかしながら、その後ヒッタイト語やトカラ語などの言語が解読される一方、新しい方法論が導入されるようになった結果、飛躍的に研究が進展し、現在では 1 sg. \*-h<sub>2</sub>er、2 sg. \*-th<sub>2</sub>er、3 sg. \*-or、\*-tor という中・受動態現在語尾が再建形として一般に受け入れられている（非現在語尾は、末尾の \*-r を取り除いた 1 sg. \*-h<sub>2</sub>e、2 sg. \*-th<sub>2</sub>e、3 sg. \*-o、\*-to である）。この再建形は、多くの分派諸言

語において対応する能動態語尾 1 sg. \*-mi、2 sg. \*-si、3 sg. \*-ti からの形態的影響を受けているが、ヒッタイト語においてはその本来の姿がほぼそのままの形で保たれている。

中・受動態 3 人称単数語尾として \*-to に加えて \*-o を建てる理由は、ヒッタイト語 ešari “sits”、kišari “becomes” などの a-クラス中・受動態や、ヴェーダにのみみられ、古典サンスクリットではみられない śaye “lies”、duhe “milks” といった形式に求められる。さらに、古期アイルランド語の berair “is borne” やトカラ語 B ste “is” (< \*sth<sub>2</sub>-o) など、\*-o という語尾を再建するうえでの貴重な形式である。

3 人称単数 \*-o と \*-to の関係は機能的なものではなく、歴史的なものであることは疑う余地はない（ヴェーダの śaye (< \*kēj-o-i) “lies” に対する古典サンスクリットの śete (< \*kēj-to-i) を参照）。しかしながら、一般の見方では \*-o と \*-to の両方が祖語に再建されているが、この点についてはヒッタイト語史的形態論の立場から根本的に再検討しなければならない。

### III. ヒッタイト語内部の興味深い事実

楔形文字が刻まれている粘土板の時期は、古期ヒッタイト (OH)、中期ヒッタイト (MH) そして後期ヒッタイト (NH) に区分することができる。この時期区分に配慮したうえで、ヒッタイト語中・受動態動詞 3 人称単数形の実例を検討し直してみると、以下の興味深い 3 つの事実が引き出される。

まず、3 人称単数形語尾の -a が -ta になる形態変化および -a が -atta になる形態変化が、ヒッタイト語の歴史時代においてもなお進行中であったことが分かる。この事実を裏付ける例は、paḥšari (MH) “protects” → paḥḥaštat (NH) “protected” や šuppijaḥḥati (OH) “cleaned” → šuppijaḥḥtari (MH) “cleans” に代表されるように、数多く見出される。

つぎに、うへの 2 つの形態変化のうち、-a → -atta はその前に -a → -ta がすでに生じていたことが前提となるが (-atta < -a + ta)、-atta を持つ中・受動態動詞は後期ヒッタイト語の特徴である。ḥarrattari “crush” や parḥattari “chases” など -atta で特徴付けられる例のうち、古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板に記録されている例はひとつもない。

さらに、ヒッタイト語内部の歴史で -ta および -atta を持つようになった 3 人称単数形の多くは、対応する中・受動態動詞 3 人称単数命令形においては、-taru ではなく、-aru という a-クラスの形式的特徴をなお保持している (eštat “sat” vs. ešaru “let him sit”、tuḥḥušta “cuts off” vs. tuḥḥšaru “let him cut off” など)。

以上の事実から紛れもなく得られる言語学的解釈は、-a が -ta になる形態変化がはじめて生じたのはヒッタイト語の先史のそれほど古い時期ではないということである。

### IV. 歴史的解釈

ここで印欧祖語という具体的な組織を持った言語が話されていたのは、一体いつ頃かを考えてみる必要がある。一般の見方では、分派語派に分裂する直前の時期は、紀元前 5,000 年から 4,000 年頃と推定されている。すでに前節で、-a → -ta という形態変化はヒッタイト

ト語の歴史時代になお作用していることをみた。したがって、もしも \*-to という中・受動態動詞 3 人称単数語尾が印欧祖語の時期に存在していたとするならば、\*-o → \*-to という形態変化は祖語の時期から後期ヒッタイト語の時期まで、およそ 3,000 年あるいはそれ以上にわたって作用していたことになる。このような長期にわたる言語変化はまったく考えられないために、印欧祖語の時期に \*-to が存在していたとみなすことは不可能である。

前節において、-a (< \*-o) が -ta (< \*-to) になる形態変化がはじめて生じたのはヒッタイト語の先史のそれほど古い時期ではないということを示したが、この形態変化の時期を具体的に確定するための見逃せない根拠がある。それは、ヒッタイト語の中・受動態動詞のうち -ta という語尾が顕著にみられるのは現在形ではなくて、過去形においてであるという事実である。たとえば、paḥšari “protects” vs. paḥḥaštāt “protected” や ḥannari “decides” vs. ḥannatāt “decided” などの多くのペアにおいて、-ta は圧倒的に過去形においてみられる。

この事実は歴史的な観点から、つぎのように解釈できる。もし対応する 3 人称単数能動態現在語尾 \*-ti と過去語尾 \*-t からの形態的影響に差がなかったならば、ヒッタイト語中・受動態動詞にはうえのような分布の差がないはずである（ギリシア語現在形 κείται “lies” < \*-to-i と ἔκειτο “lay” < \*-to を参照）。しかしながら、ヒッタイト語の 3 人称単数能動態現在語尾はその先史で破擦音化を受けた結果、-zi /-tʃi/ (< \*-ti) となった。この変化はパラ語やルウィ系諸言語といった他のアナトリア諸語にはみられないヒッタイト語固有の変化である。破擦音化によってつくられたこの能動態現在語尾 -zi は対応する中・受動態語尾になんら影響を与えなかったのに対して、能動態過去語尾 -t は対応する中・受動態語尾に影響を与えた結果、-ta (< \*-t + o) をつくったと考えられる。-ta が過去形に顕著である理由はこのようにして説明できる。したがって、ヒッタイト語の先史に生じた破擦音化の後に多くの ta-クラスの中・受動態動詞がつけられたに違いない。

## V. 結論

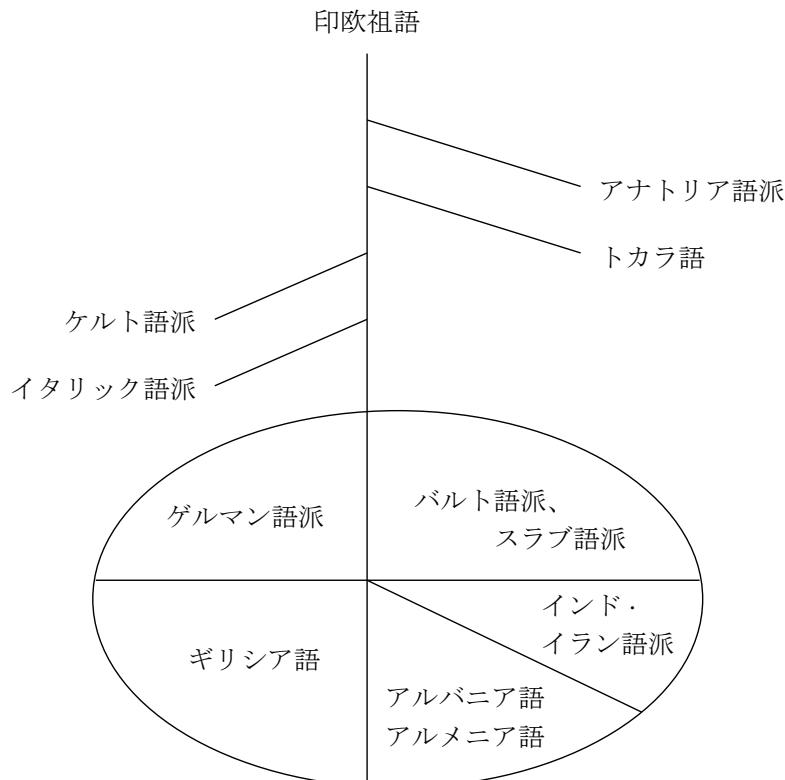
-a → -ta と -a → -atta という 2 つの形態変化は、ヒッタイト語の歴史時代になお働いていた。この事実に加えて、-atta を持つ形式が古期ヒッタイト語にみられないこと、および多くの命令形に a-クラスの特徴が保存されていることから、-ta という中・受動態語尾がつけられたのは、ヒッタイト語の先史のそれほど古い段階でないことが分かる。さらに、-ta が現在形よりも過去形に顕著にみられることから、ヒッタイト語の先史に生じた破擦音化の後に ta-クラスの中・受動態動詞の多くがつけられたと言える。

うえの分析に従うならば、アナトリア祖語および印欧祖語に再建される 3 人称単数中・受動態語尾は 1 次語尾として \*-or、2 次語尾として \*-o が再建される。一般に再建形として考えられている \*-tor、\*-to はアナトリア語派が印欧祖語から離脱した以降につけられたと考えなければならない。

## VI. おわりに

以上の中・受動態動詞の先史の分析は、アナトリア語派が印欧祖語からまず最初に分岐したという見方を支持する。このような見方のもっとも極端なものは「インド・ヒッタイト説」として知られており、この COE 研究班の第 25 回研究会（2005 年 10 月 1 日、羽田記念館）においても、Norbert Oettinger 教授（エアランゲン-ニュルンベルク大学）によって、アナトリア語派と他の印欧語派の集合は姉妹の関係にあるという、その枠組みが提示された。

しかしながら、祖語から離脱したのはアナトリア語派だけでなく、それに続いてトカラ語、さらにケルト語派、イタリック語派が離脱したが、残された諸言語はなお言語共同体としての共通の特徴を持っていたという見方が近年有力になってきた。ひとつの語族に属する諸言語が歴史的に近いか遠いかは、それらの言語間にみられる共通の言語学的革新が多いか少ないかによって決定される。つまり、他の言語にはない革新的特徴が特定の言語間に多くみられるならば、それらの言語は歴史的に近い関係にあることになる。これが言語を下位分類する際の基準である。この基準に従えば、印欧諸語間の関係は以下のように図示することができる。



## 第 27 回研究会報告 – 2

現代日本語における 2 種のモーダル助動詞類について  
—推論の方向性とメノマエ性の観点から—

田窪 行則

Japanese modal auxiliaries have traditionally been classified into two subclasses: *daroo* (would), *hazuda* (should), *nitigainai* (must), henceforth the *daroo*-class, as opposed to *yooda* (it appears), *rasii* (it seems), and possibly, *sooda* (I hear) henceforth the *yooda*-class; the rest of the modal auxiliaries such as, *kamosirenai* (it is possible), possibly *noda* (it is that) belong to both groups. The distinction is based on the co-occurrence possibility with adverbs *kitto* (most probably), which only co-occur with the *daroo*-class, and *doomo* (apparently), which only combines with *yooda*-class (Morimoto (1994), Teramura (1984), Takubo (2003) among others). The nature of the distinction, however, has not been seriously studied.

In this paper, we will first give some new facts concerning the distributional differences between the two sub-classes. We then argue that the distinction among these two types of modal auxiliaries is related to the directionality of inference, which we express as a generalized form of modus ponens (i.e. inference of the pattern,  $P \rightarrow Q$ ,  $P \models Q$ ), and its inverse.)

The auxiliaries in the *daroo*-class can combine with *imagoro* (about this time) to indicate an event in the location removed from the speaker (see (1)), while those in the second group cannot (see (2a)), unless a special (prosodic) prominence indicating inappropriateness is placed on *imagoro* as in (2b), in which case the implication is added that the event expressed occurred later or earlier than was desirable (cf. Takubo & Sasaguri 2001).

(1) John-wa imagoro Seoul-ni tuiteiru {*daroo/hazuda*}.

John-TOP about-now Seoul-LOC has-arrived {would/must}

‘John would have arrived in Seoul about this time.’

(2) a. <sup>?</sup>John-wa imagoro Seoul-ni tuita {*yooda/rasii*}.

John-TOP about-now Seoul-LOC arrived {appear/seem}

‘John appears to have arrived in Seoul about this time.’

b. John-wa IMAGORO Seoul-ni tuita {*yooda/rasii*}.

The two subclasses also differ in their scope properties. Modal auxiliaries in the *daroo*-class do not include conditional premise in their scope, and serve as a consequent in a conditional inference from the antecedent (see (3)).

- (3) Kootei buai-ga sagar-eba, keiki-ga yoku naru {*daroo/hazuda*}.  
 Public-interest-NOM fall-if economy-NOM become-good {would/should}  
 ‘If the public interest rate goes down, the economy should/would look up.’

Those in the *yooda*-class must include the premise in their scope, and thus can only serve as an assertion of a general conditional statement rather than a conditional inference (see (4)).

- (4) Kootei buai-ga sagar-eba, keiki-ga yoku naru {*yooda/rasii*}.  
 Public-interest-NOM fall-if economy-NOM become-good {appear/seem}  
 ‘It appears (to be the case) that if the public interest rate goes down,  
 the economy will look up (accordingly).’

That the two subclasses differ in their scope properties is further supported by the following fact. With *daroo*-class auxiliaries, the antecedent and the consequent in the conditional statement (4) can each be expressed by different speakers as in (5).

- (5) A: Kootei buai-ga sagatta-yo.  
 Public-interest-NOM fell-SFP  
 ‘The public interest rate has been cut down.’  
 B: Zya, keiki-ga yoku naru {*daroo/hazuda*}.  
 then economy-NOM become-good {would/should}  
 ‘Then, the economy should/would look up.’

This is so because with *daroo*-class auxiliaries, the premise is not in the scope of the modal, and therefore is not included in the assertive part of the sentence. With *yooda*-class, the assertion involves the conditional relation between the antecedent and the consequent. So the consequent cannot be uttered independently of the antecedent. Therefore, if they are separately asserted as in (6), the result is unacceptable.

- (6) A: Kootei buai-ga sagatta-yo.  
 Public-interest-NOM fell-SFP  
 ‘The public interest rate has been cut down.’  
 B: ??Zya, keiki-ga yoku naru {*yooda/rasii*}.  
 then economy-NOM become-good {appear/seem}  
 ‘Lit. Then, the economy appears to look up.’

We show that the difference between the two subclasses can be characterized in terms of the directionality of the inference they involve. We express inference based on knowledge as





in its scope. The focused constituent receives a phonological salience and starts a phonological phrase. There must be an intonational break between *imagoro* and *Seoul-ni* in (9) and *imagoro* never receives phonological salience, the salience falling either on *Seoul-ni* or *tuiteiru*, suggesting that *imagoro* is not in the scope of *daroo*. The phonological phrasing may be represented as in (10).

(10) {John-wa} {*imagoro*} {Seoul-ni tuiteiru *daroo*}.

In contrast, the inference involved in the *yooda*-class is abductive and identifies  $x$ , given  $y$ , namely the inverse  $f^{-1}$  of  $f$ . Since  $x$  may not be uniquely determined given  $y$ , the inference can only give a most plausible candidate for explaining  $x$  in the context of utterance. Look at the situation in (11).

(11) Situation: Taroo looks at the newly published alumni newsletter  
and finds that one of his classmates has changed her surname.

- a. Kanozyo-wa kekkon-sita *yooda*.  
she-TOP married appear  
'It appears that she has got married.'
- b. #Kanozyo-wa kekkon-sita *daroo*.  
she-TOP married would  
'She would have gotten married.'

The knowledge used in the inference is the general practice in Japan about women changing names after marriage. The inference obviously is not deduction, because you cannot deduce, from the knowledge that one has changed one's name, that she has got married. In fact, *daroo*-class auxiliaries cannot be used here. The inference involved is the inverse of deduction: it identifies the possible minor premise given general knowledge and the conclusion. The inference is abductive in the sense it involves the identification of a most probable candidate for causing the situation in question based on some general knowledge. That *yooda*-class auxiliaries involve abductive inference can be further illustrated by the use of *imagoro* in (2b) repeated here as (12).

(12) John-wa IMAGORO Seoul-ni tuita *yooda*.  
'It appears that John arrived in Seoul at this (late) hour.'

The intonational pattern shows that *IMAGORO Seoul-ni tuita yooda* forms a phonological phrase, suggesting that *IMAGORO* is within the scope of *yooda* and receives focus. The phonological fact can be described if *yooda*-class auxiliaries involve the inverse function. *Imagoro* used in *daroo*-class auxiliaries involved identification of an event  $e_j$  given some

general knowledge  $f(t) = e$  and time  $t_i$ . We propose that with *yooda*-class auxiliaries, the inverse function  $f^{-1}(e) = t$  is involved, which gives time given  $f$  and  $e$ . The new information, therefore, is the time point: an event and the general knowledge are presupposed, giving an informational structure similar to pseudo-cleft, i.e. ‘the time that John arrived in Seoul is this time (and not the time expected).’ The informational structure and the intonational pattern can be accounted for if we assume the following structure.

(13) [ John-wa [ IMAGORO Seoul-ni tuita *yooda* ]

The scope about conditionals can be accounted for in the same way. The whole conditional ‘if p then q’ must be in the scope of *yooda*-class auxiliaries as in

(14) [ [ if p then q ] *yooda* ].

Unlike *imagoro* which requires obligatory focus, the focus can be put on any constituent within the scope. Given the abductive nature of *yooda*, ‘if p then q’ can be interpreted as providing an explanation for observed facts, say p & q. ‘If p then q-*yooda*’ can then be understood as providing a major premise, or some general knowledge which serves to account for observed facts, the minor premise and the conclusion.

We show that the facts noted in above about types of auxiliaries can be accounted for if we assume that the conclusion of deductive inference can be conjectural while that of abductive inference must be a proposition whose truth value is *settled* — i.e., already objectively determined by the actual situation (although the speaker may not know it) (cf. Kaufmann 2005). This includes general world knowledge. We show that the fact about *imagoro* in (1–2) and the scope fact noted in (3–6) can be explained by assuming that the sentences embedded under *yooda*-type auxiliaries must be settled in this sense, while those under *daroo*-type auxiliaries need not.

## Reference

- Kaufmann, S. 2005. Conditional predictions: A probabilistic account. *Linguistics and Philosophy* 1: 45–77.
- Morimoto, J. 1994. *Hanasite no syukan-o arawasu hukusi-ni tuite* (On adverbs expressing speaker’s subjectivity). Tokyo: Kurosio syuppan.
- Takubo, Y and J. Sasaguri. 2001. Ima no taioobutu-o dooteisuru *imagoro*-ni tuite (On *imagoro* as a counterpart identifier of the utterance time). In: Sasaki, A. Y. and M. Minami (eds.), *Gengogaku to Nihongo Kyoiku* (Linguistics and Japanese Education). Tokyo: Kurosio syuppan. pp. 39–55.

- Takubo, Y. 2003. Gendai Nihongo-ni okeru nisyu no moodaru zyodoosirui-ni tuite (Two modal auxiliaries in Modern Japanese). In: *Festschrift for Professor Umeda's 70th anniversary*. Seoul: Thayhaksa. pp. 1003–1025.
- Teramura, H. 1984. *Nihongo no sintakusu to imi 2* (Syntax and Semantics of Japanese Vol. 2). Tokyo: Kurosio syuppan.

---

## 編集後記

COE 31 研究会ニューズレター第 17 号をお届けいたします。研究会等、今後も活発に活動して参ります。皆様のあたたかいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

## 連絡先

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」(事務補佐員: 稲垣 和也)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科言語学研究室

Tel & Fax: 075-753-2862 E-mail: [eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp)

Web page: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia>